様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００８３７

研究課題名（和文）「気づき」の言語化がpragmatic routinesの習得に与える影響

研究課題名（英文）Effects of vervalization of noticing on acquisition of pragmatic routines

研究代表者
大須賀　直子（Osuka, Naoko）

明治大学・国際日本学部・専任教授

研究者番号：４０５１４１６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：まず、パイロット調査の結果から、気づきのタスクはPragmatic Routines（PR）の習得に有効であるが、言語化するかどうかは習得に影響しないことがわかった。学習者はすべての気づきを言語化するわけではなく、また、言語化したからと言って必ず産出に結びつくわけではない。次に、本調査で、気づきのタスク、メタ語用論的解説、産出練習を含む、明示的な語用論指導を包括的に行ったところ、事後テストでPRの習得に大きな効果が見られ、遅延事後テストでその効果が１カ月後も持続していることがわかった。気づきのタスクを含む明示的な語用論指導は、PRの習得に短期的・中期的に効果があることを示唆する結果であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
Pragmatic Routinesの習得は語用論的能力を伸ばす上で重要だが、習得は容易でないことが先行研究で指摘されている。また留学などで対象言語に触れても、自然に習得することは難しいこともわかっている。そこで、本研究では、気づきを言語化するタスクがPR習得に効果的ではないかと考え、調査を実施した。その結果、気づきのタスク自体には効果があるが、言語化の有無では差がない事がわかった。一方で、気づきのタスクを含む明示的な語用論指導を包括的に行ったところ、PR習得に大きな効果が見られた。この結果は、明示的な語用論指導の重要性を示し、英語教育に語用論的指導をもっと取り入れるべきであることを示唆する。

研究成果の概要（英文）：First, the results of the pilot study indicated that “noticing the gap” task is considerably effective in the acquisition of Pragmatic Routines (PRs). However, it has also revealed that verbalization of noticing does not affect acquisition. Learners do not verbalize all of their noticing, and their verbalization of noticing does not necessarily lead to production of PRs. Second, in the main study, explicit pragmatic instruction, including “noticing the gap” task, meta-pragmatic explanations, and production practice, was conducted. The results of the post-test showed that this kind of explicit instruction is highly effective for mastering PRs. The results of the delayed-post-test, which was conducted one month later, showed that the effects were maintained. These results suggest that explicit pragmatic instruction, including noticing task, has short-term and medium-term positive effects on learners’ PR acquisition.

研究分野：言語学（語用論）

キーワード：明示的語用論指導　Pragmatic Routines　気づき　語用論的能力　言語化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

Pragmatic routines とは、 “nice to meet you”や“that’d be great”などの語用論的慣用表現のことである。Pragmatic routines（PR）の習得が語用論的能力の発達にとって重要であることは先行研究で指摘されているが、一方で、第二言語学習者にとっては習得が難しいことも明らかになっている。筆者の以前の調査（Osuka, 2017）では、大学生が１セメスターの留学を経験しても PR の習得には極めて限定的な効果しか得られなかった。学習者の PR の習得を促進するためには、何らかの指導や足場掛けが必要であると考えられる。そこで、語用論的能力の発達において「気づき」が重要であることに着目し、学習者が自分の発話と英語母語話者の発話を比較する “Noticing the gap”のタスクをおこない、さらにその気づきを言語化することで、PR 習得に効果が得られるのではないかと考え、本研究を計画・実施するに至った。

２．研究の目的

本研究の第一の目的は、気づきの言語化が PR の習得に、短期的・中長期的にどのような効果を及ぼすかを探ることである。第二の目的は、“ Noticing the Gap”のタスクを含む明示的な語用論指導が、PR の習得に、短期的・中長期的にどのような効果を及ぼすかを探ることである。

３．研究の方法

まず、気づきの言語化が学習者の PR の習得にどのような効果を及ぼすかを探るために、パイロットスタディをおこなった。この調査では、12 人の大学生（男性 4 名、女性 8 名；TOEFL iBT の平均値は 63.7）を対象に、16 の場面（対象となる PR は 17）から成る口話産出タスク（Oral DCT）を実施した（事前テスト）。このタスクの直後にネイティブ・スピーカーのモデル回答を提示し、参加者に自分の発話とネイティブ・スピーカーのモデル回答を比較して気づいたことを筆記してもらった。1 週間以内に、参加者に再び Oral DCT を行ってもらい（事後テスト）、短期的な効果を検証した。さらに、約 1 ヵ月後、中期的な効果を検証するために、再び Oral DCT を行った（遅延事後テスト）。

本調査では、気づきのタスクを含む明示的な語用論指導の効果を探るために、33 名の参加者に PR に関連する語用論の授業を受講してもらった。参加者は全員大学生で、そのうち男性が 11 名、女性が 22 名だった。英語習熟度は CEFR B2 レベルが 15 名、CEFR B1 レベルが 18 名で、１カ月以上の海外留学経験ありは 18 名、なしは 15 名であった。33 名は、実験群 16 名と統制群 17 名に分けられ、実験群のみ気づきを言語化するタスクをおこなった。統制群にも気づきの時間を設けたが、言語化はしなかった。

授業は 1 時間の授業を週に 1 回 3 週連続で受講してもらった。各授業は、「依頼」、「断り」、「感謝」にそれぞれフォーカスし、1 回の授業は 1) モデル回答の提示、2) “Noticing-the-gap”のタスク（自分の回答とモデル回答を比較し、気づいたことを書く）、3) 語用論的解説、4) 産出練習、の構成であった。

産出データ収集のために使用したのは、computer-animated production task (CAPT)である。これはアニメーションを使って場面を提示し、その場面に自分がいたら何と言うかを回答する口語産出タスクである。この調査で使用した CAPT は、アニメーション動画作成サイトを利用して、筆者が作成した。場面は、依頼 6 場面、断り 5 場面、感謝 5 場面で、対象となる PR は全部で 19 であった。参加者は CAPT を授業開始直前（事前テスト）、3 回の授業終了直後（事後テスト）、１カ月後（遅延事後テスト）の 3 回行なった。練習効果を防ぐため、事後テストでは CAPT の場面提示順序を変え、遅延事後テストでは内容自体を変更した。

収集したデータは、SPSS のフィッシャーの直接確率検定を使って分析された。

４．研究成果

４．１．　パイロットスタディの結果

表１に示したのは、パイロットスタディの結果である。事前テストでは産出しなかった PR を事後テストで産出したケースは全体の約 30%（61/204）で、多くの場合、その効果は遅延事後テストまで維持された。また、遅延事後テストで初めて PR を産出したケースもあった。一方、全体の約 50%（100/204）のケースでは、一度も対象の PR を産出しなかった。参加者には統語的に複雑な PR を避け、既知の PR に依存する傾向が見られた。以上の結果から、気づきの言語化は、PR の習得にある程度の効果はあるが、限定的であることがわかった。さらに分析を進めると、参加者は、気づきを筆記したときに言及しなかった PR を産出することが多いことがわかった。これは、学習者が気づいたことを必ずしも言語化していないことを示唆している。逆に、気づきを筆記したときに対象の PR に言及していたにもかかわらず、事後・遅延事後テストで産出していないケースも多く見られた。以上のことから、気づきを言語化することが必ずしも PR の産出にはつながらない可能性が示唆された。

表１：PR の産出の変化

	Produced at Pre-test	Newly produced at post/delayed-post tests				Never produced
		(NPP*	NPN**	NNP***)	Total	
Do you have …	0	(0	2	1)	3	9
What time is it?	0	(5	1	2)	8	4
Can I …	9	(1	1	1)	3	0
Would you mind …	1	(0	1	1)	2	9
Could you …	7	(2	2	1)	5	0
I was wondering if …	0	(0	0	3)	3	9
no thanks	3	(0	0	0)	0	9
I'm saving …	0	(1	1	2)	4	8
is not (really) my thing	0	(3	0	1)	4	8
no thank you	5	(5	0	1)	6	1
I'm busy	2	(4	0	0)	4	6
I can't make it	0	(0	1	0)	1	11
Thank you so much	7	(1	2	0)	3	2
I'll pay you back	2	(3	0	0)	3	7
You didn't have to	0	(5	1	2)	8	4
I (really) appreciate …	7	(0	1	0)	1	4
That would be great	0	(2	0	1)	3	9
Total	43	(32	14	15)	61	100

*NPP は、事前テストで産出されず、事後および遅延事後テストで産出されたことを示す。
**NPN は、事前テストで産出されず、事後テストでは産出されたが、遅延事後では産出されなかったことを示す。
***NNP は、事前・事後テストでは産出されず、遅延事後テストで産出されたことを示す。

４．２．本調査の結果

表２は、PR の産出頻度が事前テストと事後テストでどう変化したかを示している。実験群と統制群の PR の産出頻度はどの PR においても有意差がなかったため、表では両群を合計した数で頻度を示している。PR の産出頻度は 19 のうち 16 で有意に増えている。このことから、明示的な語用論指導は PR の習得において短期的には大きな効果があることがわかった。

表２：PR の産出の変化：事前テストと事後テストの比較

	Frequency			
PR	Pre	Post	p-value	
Can I	20/33	24/33	0.217	NS
May I	0/33	17/33	<.001	＊＊＊
Could you	40/66	41/66	0.5	NS
Would/Do you mind	1/33	12/33	<.001	＊＊＊
I was wondering if	1/33	20/33	<.001	＊＊＊
No thanks/thank you	16/66	61/66	<.001	＊＊＊
I’d love to	6/66	15/66	0.028	＊
I wish I could	3/66	30/66	<.001	＊＊＊
I can’t make it	1/66	17/66	<.001	＊＊＊
I’m busy	6/66	10/66	0.212	NS
I have plans	4/66	27/66	<.001	＊＊＊
Maybe next time	0/33	17/33	<.001	＊＊＊
not (really) my thing	0/33	26/33	<.001	＊＊＊
Thank you so much	8/66	32/66	<.001	＊＊＊
I (really) appreciate	9/66	25/66	<.001	＊＊＊
That would be (great)	1/33	17/33	<.001	＊＊＊
You didn’t have to	0/33	23/33	<.001	＊＊＊
Thank you for having me	1/33	31/33	<.001	＊＊＊
I’ll pay you back	4/33	27/33	<.001	＊＊＊

* <.05　　*** <.001

表３は、PR の産出頻度が事後テストと遅延事後テストでどう変化したかを示している。遅延事後テストでは、PR の使用頻度はやや減ったが、有意に減ったのは“ I wish I could ”の１つだけだった。このことから、明示的な語用論指導の効果は持続し、中期的な効果があると言えよう。

表３：PR の産出の変化：事後テストと遅延事後テストの比較

	Frequency			
PR	Pre	Post	p-value	
May I	17/33	16/33	0.5	NS
Would/Do you mind	12/33	11/33	0.5	NS
I was wondering if	20/33	16/33	0.229	NS
No thanks/thank you	61/66	56/66	0.136	NS
I'd love to	15/66	15/66	0.582	NS
I wish I could	30/66	12/66		＊＊＊
I can't make it	17/66	14/66	0.546	NS
I have plans	27/66	21/66	0.183	NS
Maybe next time	17/33	14/33	0.311	NS
not (really) my thing	26/33	26/33	0.618	NS
Thank you so much	32/33	28/33	0.3	NS
I (really) appreciate	25/33	22/33	0.294	NS
That would be (great)	17/33	13/33	0.229	NS
You didn't have to	23/33	21/33	0.397	NS
Thank you for having me	31/33	30/33	0.5	NS
I'll pay you back	27/33	28/33	0.5	NS

*** <.001

また、筆者の先行研究（Osuka, 2017; Osuka, 2023）では、統語的に難しかったり、馴染みのない PR を第２言語学習者が産出することは難しいことが示されたが、本研究の参加者は、統語的に難しい PR (例：“I was wondering if”、“Would you mind”) や馴染みのない PR(例：“not (really) my thing”、“I can't make it”)を産出することができた。 このことから、語用論指導を明示的におこなえば、EFL 環境でも PR を習得することは可能であることが示唆された。

４．３.結論

パイロットスタディと本調査の結果から、“Noticing the Gap”のタスク自体は PR の習得に有効であるが、言語化するかどうかは習得に影響しないことがわかった。学習者はすべての気づきを言語化するわけではなく、また、言語化したからと言って必ず産出に結びつくわけではない。また、本調査からは、“Noticing the Gap”タスクを含む明示的な語用論指導は、短期的・中期的に PR の習得に大きな効果があるという結果が得られた。もちろん、本研究の参加者は少数であり、この結果を簡単に一般化することはできない。また、効果の持続については、１カ月よりも長い期間をおいて確認する必要がある。しかし、冒頭で述べた、留学を通しての PR 習得の難しさを鑑みても、明示的指導に効果があることは確かであると言えよう。

（参考文献）

Osuka, N. (2017). Development of pragmatic routines by Japanese learners in a study abroad context. In I. Kecskes & S. Assimakopoulos (Eds.), Current issues in intercultural pragmatics (pp. 275–296). John Benjamins.

Osuka, N. (2023). Effects of a noticing-the-gap activity on production of pragmatic routines. Global Japanese Studies Revies, Meiji University, 15, 77-96.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Naoko Osuka	４．巻 15 (1)
２．論文標題 Effects of a noticing-the-gap activity on production of pragmatic routines・	５．発行年 2023年
３．雑誌名 明治大学国際日本学研究	６．最初と最後の頁 77-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Osuka Naoko	４．巻 44
２．論文標題 The Effect of Study-Abroad on Pragmatic Transfer	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Chinese Journal of Applied Linguistics	６．最初と最後の頁 3～20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/CJAL-2021-0001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　7件）

１．発表者名 Naoko Osuka
２．発表標題 Pragmatic development in refusals in a study abroad context
３．学会等名 AAAL 2024　(Houston)（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 Naoko Osuka
２．発表標題 The effect of explicit pragmatic instruction on production of pragmatic routines
３．学会等名 18th International Pragmatics Association (Brussels)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 大須賀直子
２．発表標題 Pragmatic Routines指導の効果
３．学会等名 JACET第62回国際大会（東京）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Naoko Osuka
２．発表標題 Effects of a noticing activity on production of pragmatic routines
３．学会等名 INPRA 2022 (online)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Naoko Osuka & Yuki Hino
２．発表標題 Pragmatic Features of Japanese Returnees’ Speech Act Performance in English
３．学会等名 56th RELC International Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Naoko Osuka
２．発表標題 Effects of type of speech acts on pragmatic development in a study abroad context
３．学会等名 17th International Pragmatics Association (online)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Naoko Osuka
２．発表標題 Effects of study abroad experiences on pragmatic transfer
３．学会等名 16th International Pragmatics Association (Hong Kong)（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Lala U. Takeda、Megumi Okugiri、Naoko Osuka、他７名	４．発行年 2019年
２．出版社 風間書房	５．総ページ数 224
３．書名 A Pragmatic Approach to English Language Teaching and Production	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関